



Title	関東大震災と在日亡命ロシア人の運命
Author(s)	ポダルコ, ピョートル エドアルドヴィチ
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 219-237
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78034
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関東大震災と在日亡命ロシア人の運命

ポダルコ, ピョートル・エドアルドヴィチ

This paper focuses on The Great Kanto Earthquake, which occurred on Sep. 1st, 1923, and on its influence on the fate of Russian emigres in Japan. After the February and October Revolutions of 1917, many Russians from different social strata came to the Far East to escape from the horrors of the Bolshevik regime. Most of them planned to go to America or Europe, but they could not fulfill that dream because of financial problems and visa restrictions. Those so-called "White Russians" were also unable to return to their homeland, and could only rely on good will of the international community. The earthquake caused enormous damages and loss of life, but the measures by the Japanese government as well as the foreign aid given then to Japan from all over the world finally gave a chance to Russian refugees to leave Japan.

Many Russians were first sent to Kobe, where they were hosted by the foreign community of that city, famous for its "international spirit" since the days of the Foreign Settlement of the Meiji Era. The "Kobe Foreign Relief Committee" played an important role in arranging temporary housing for those Russians who could not leave Japan immediately.

Special attention is paid to the difference between the first and second "waves" of Russian emigration to Japan, which were marked by the Earthquake. Almost all of the Russians, who outlived the disaster, later tried to move to other countries; those who came to

* The Great Kanto Earthquake and the fate of Russian emigres in Japan.
(PODALKO Petr Eduardovich)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Japan after 1923 mostly stayed there for a while and started “a new life in a new place”. They were quite different from their predecessors, both socially and mentally. The Great Kanto Earthquake played an important role in changing the “face” and characteristics of the phenomenon of Russian emigration to the East.

The research is based on numerous materials, primarily unpublished, including official reports and other papers of the “Old” Russian Embassy in Japan, private letters and memoirs of the late Dmitrii I. Abrikossow, who served at that time as the last official representative of Tsarist Russia in Japan.

はじめに

1923年9月1日の関東大震災は東京・横浜をはじめとする数多くの都市、村などを破壊し、死傷者は13万人を超え、57万人が住居を奪われた。全損害は1923年当時の物価にして65億円(当時日本の全財産の10-11%)に上った¹⁾。世界のマスコミはお互いに競争するように、災害の重苦しい記事を載せた。ポズドネーフの地震直後の著書によれば、マスコミは「大きな都市ばかりでなく、地域全体がなくなり、海軍や重要な基金等も消えてしまい」、「日本国はこれからしばらく二流または三流の国へ低下するはず」などと伝えたい²⁾。もちろん、被害は非常に大きかった。東京と横浜の近辺は、空襲後のような景色であった。しかし、1924年1月頃になると、既に「100日が経ってからは、東京は復興する気配があり、…町は既に復興が感じられる。」と書かれるようになった³⁾。

本研究の目的は、関東大震災の目撃者の証言・その他の資料に基づいて、当時の在日亡命ロシア人の関東大震災の経験、それが彼らの運命に与えた影響などを明らかにすることである。

本研究で利用した主な資料は、以下の通り、三種に分けている。

¹⁾ Позднеев Д. Япония: страна, население, история, политика. М., 1925, с. 334-340.

²⁾ 同上, с. 333.

³⁾ 同上, с. 334.

- (1) 当時の駐日帝政ロシア大使館(以下、「大使館」または「旧大使館」と呼ぶ)の通信・報告等⁴⁾。
- (2) 日本およびヨーロッパで亡命生活を送った帝政ロシアの外交官の書簡。

1917年10月の社会主義革命直後、新しいボリシエビキ政府の外務大臣、トロツキー(L. D. Trotskii, 1879-1940)の1917年11月26日(新暦の12月9日)付の令により、ソビエト政権を認めなかった元帝政ロシアの外交官は、全員退職させられた⁵⁾。一方、海外諸国で勤めていた外交官たちは、トロツキーの令に反対し、フランスのパリで集会を行い、元駐ローマロシア大使ミハイル・ギルス(M. N. Girs)を議長とする「大使会議」を設立した⁶⁾。それ以降、この大使会議は、海外諸国に在住した元帝政ロシア外交官にとり、彼らの活動を一致させるコーディネータ機関になった。駐東京ロシア大使館のスタッフも大使会議との定期的連絡を維持していた。

本論文で使用された資料の(1)と(2)は、今まではほとんど未発表のもので、はじめて研究対象になるものである。

- (3) 大使館最後の代理大使ドミトリー・アブリコソフが晩年に書いた回想録。

このアブリコソフ(D. I. Abrikossow, 1876-1951)は、モスクワ大学を卒業してから外務省に就職したいわゆる「キャリア外交官」であった⁷⁾。彼の在日職務期間は、1913-1914年(駐日ロシア大使館二等書記官)と1916-1925年(最初是一等書記官、1921年後半以降は代理大使)の2回であった。さらに、彼は、日ソ国交樹立以後、東京(1925-1941年)ならびに神戸(1942-1946年)で亡命生活を送った。

⁴⁾ *Reports of the Russian Diplomatic Representatives in Japan. Information about Russia gathered in Japan from Jan. 15th 1924 to Nov. 17th 1926.* — Stanford University, Hoover Institution Archives (unpublished). 以下に、Reports...と略称する。本論文に掲載した「報告」、「手紙」、「電報」等が、全てこの資料の出典である。以下に、注を付ける場合、題目の代りに略称として「○年○月○日付」だけを書く。

⁵⁾ *Чему свидетели мы были. ... Переписка бывших царских дипломатов (1934-1940). Сборник документов в 2-х книгах.* М., МИД РФ и СВР РФ, 1997, Кн. 2-я, с.389.

⁶⁾ 同上, с.386-387.

⁷⁾ アブリコソフの略歴の出典: *Чему свидетели мы были. ... Переписка бывших царских дипломатов (1934-1940). Сборник документов в 2-х книгах.* М., МИД РФ СВР РФ, 1997. Книга 2-я, с. 371.

1946年11月、彼はアメリカ(カリフォルニア州、そこで死亡)へ移住したが、アメリカでも1930年代に書き始めた回想録を書き続けた。現在、この回想録は、大正・昭和初期の日本事情を描く貴重な資料の一つである⁸⁾。

1. 地震直後のロシア大使館

1923年9月1日の休日、アプリコソフによると、彼はロシア陸軍武官 M. P. ボッチャーギンからの提案で、日光へ行った。二人は、日光を回りながら、震動を感じたが、それを軽く見た。翌日の朝の5時頃、召使いから起こされたアプリコソフは、様子を聞いて、最初の電車で東京へ出発した。当日、大正天皇も日光にいたため、電車は宮内庁の貸切りになり、牧野伸顕らが一緒に乗っていた。途中、両側に崩壊した建物や道路などが見え、橋が落ちた川を渡ることもあった(「まるで映画俳優かのように、バランスを守りながらレールだけの架け橋を渡った」とアプリコソフは後に書いた)⁹⁾。普通3時間かかる東京まで約10時間がかかった。因みに、この電車は東京まで走れず、約15キロ手前で止まったので、そこからは歩き続けるよりほかはなかった。

町を横断するアプリコソフは、至る所で火事が起り、東京が瓦礫の山と化したのを見た。上野公園も、日比谷公園も難民であふれていた。驚くべきことに、国会議事堂の近くにあったロシア大使館はほとんど被害を受けていなかった。風向きが違ったため、周りの火事が移らなかった。石の垣根が崩れたが、建物自体はひびや壁の割れ目以外に、大きな問題がなかった。アプリコソフが大使館に到着する前に、セルギー日本大主教とウラジオストークのミハイル主教をはじめ、避難所を求める亡命ロシア人の大群集が集まってきた。

当時、日本には約1000人の亡命ロシア人がいた¹⁰⁾。当時、日ソ国交樹立の1年半前であったので、在日ロシア人は皆「亡命者」(後に「白系ロシア人」)の資

⁸⁾ Abrikossov D.I. *Memoirs. Part 1, 2.* — Columbia University Archives, NY (Manuscript). この回想録の一部は、アプリコソフ本人が死亡した後に、アメリカの研究者 George A. Lensen の編集で出版されることになった。その際、題目が *Revelations of a Russian Diplomat (The Memoirs of Dmitrii I. Abrikossov)*. (Ed. by George A. Lensen, Washington University Press, Seattle, 1964.) になった。但し、筆者は未発表の原稿も調べてきたので、ここでは両方を出典として使用した。また、以下にそれぞれを「Abrikossov, ...」と「*Revelations of a Russian Diplomat. . .*」の略称で使用する。

⁹⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 307.

¹⁰⁾ P. ボダルコ著(1998年3月刊)「白系ロシア人 F.D. モロゾフの在日亡命生活の経験について」—『大阪大学言語文化学』第7号、116-117頁。

格であった。さらに、駐日ロシア大使館は、亡命者の面倒をみると共に、在日ロシア人の代表的な機関であった。

革命前の在日ロシア外交機関は、表1の通りである¹¹⁾。

表1. 1914年頃の在日ロシア外交機関

地 域	現地の上級機関	他 の 機 関
日本本土	東京大使館	領事館： 横浜、長崎、神戸、 函館、敦賀
朝鮮半島	ソウル総領事館	領事館： 釜山・馬山浦、 清津、元山
遼東半島	大連総領事館	—

但し、領事館によって、主任担当者は領事か副領事、または代理領事 (Consular Agent) であるか、それぞれ違う場合もあった。例えば、横浜領事館は総領事館とも言い、敦賀領事館は小さくて領事支部といえるものであった。また、神戸や函館、更に元山の領事館は、時によって副領事外交官が担当した。ちなみに、1921年までロシア大使を勤めた V. N. クルペンスキー (Krupenskii) は、在東京外交団の首席であった。

¹¹⁾ 出典：Lensen, George A. *Russian Diplomatic and Consular Officials in East Asia (1858-1968)*. Tokyo, Sophia University Press, 1968.

表 2. 革命直前および日ソ国交樹立直前の在日ロシア外交官数(概数)

地 域	1916・1917年のスタッフ	1924年末のスタッフ
日本本土	20—25人	約 6 人
朝鮮半島	約 5 人	約 2 人
遼東半島	約 2 人	1 人

表 2 からわかるように、革命後旧大使館の閉館直前にはスタッフは三分の一になった。(出典は表 1 と同じ)。

大使館のスタッフは、震動が繰り返すと思ったので、危険がなくなるまでの間中庭に避難者の受付や毛布・布団などを備えて「臨時キャンプ」のような措置を行ってきた。しかし、朝鮮人・中国人の虐殺の噂や政府が敷いた非常事態等を考えた上で、外壁が倒れたままの大使館に難民が大勢残ってはいられないので、スタッフの皆が拳銃等の武器を用意していつも持参するようにし、さらにアプリコソフは様子を見た上で、公式的に市役所に援助を求めた¹²⁾。市役所から協力を得た後に、彼はそれについてパリへも詳しい情報を送った¹³⁾。特に、当局や他国の外交官の皆が祖国からの援助を受け入れず、帰国も出来なかった亡命ロシア人に対して常に好意的な態度を守っていたことは、大使館の報告に度々現れる¹⁴⁾。また、大使館の負担を軽くするために、大使館の日本人職員はしばらく日本外務省から特別配給食糧を受けることになった。一方、大使館は地震後直ぐに日本政府へロシアの代表として哀悼・お礼などを表した¹⁵⁾。

フランスのパリに在住した大使会議のギルス議長に宛てた1923年9月6日付の電報の中で、アプリコソフは、「巨大な災害があり、東京の三分の一と横浜の全体が瓦礫と化して…大使館は破損したが使命を果たしています。スタッフは無事です。横浜領事館は崩壊し、軽傷を負った領事と書記官が港にある船に助けられている。居留するロシア人のなかの死傷者の数を調べているところです」という最初の報告を書いた。9月10日に、ギルスからは「死を免れた皆さま、心よりおめでとう御座います。死傷者に対して哀悼の意を表します」という返事が届い

¹²⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 309-310.

¹³⁾ 1923年9月10日付の報告。

¹⁴⁾ 同上;1924年1月12日付の報告など。

¹⁵⁾ 1923年9月10日付の報告。

た¹⁶⁾。

鉄道が復旧した後、大使館の職員が主教と共に横浜へ行き、そこで死亡した同国人へのパニヒダ(追悼祈儀式)を行った。隣接した在横浜ロシア領事館とアメリカ領事館は崩壊した。アメリカとフランスの領事が死亡し、ロシアのヴィルム(A. K. Vilm)領事が軽傷を受けた。中間的なデータによれば、外国人の死者総数は150人以上であり、その中には15人のロシア人も含まれている。後に、ロシア人の死傷者は約60人に上った¹⁷⁾。地震直後、10月23日にロシア大使館で発行された死者の名簿は、男性18名、女性28名、さらに子供16名を含んでいる。その内、帝政ロシアの人口比を反映して、「ロシア人」(正教または他のキリスト派)らしい名前を持つ者約35名、タタール人をはじめ「回教」の名前を持つ者約10名、次にユダヤ系およびドイツ系の名前を持つ者約15名、フィンランド人の1名などが入っている(参考：付属資料1)。また、同日に発行された身体障害者になったロシア人の名簿は、横浜のヴィルム総領事をはじめ、5名を含む(参考：付属資料2)。

2. 日本政府および居留外国人コミュニティの対策

地震直後、アメリカの大使館は、東京の中心にある帝国ホテルを借りて、そこに難民・被害者にかんする情報センターを設置した。また、ホテルでは外国人のために、国籍を問わず昼食を出していた。多くのロシア人は、それを「大統領の勘定」(大統領のおごり)といいながら、そこへ食事に通った¹⁸⁾。

政府の特別令によって、震災直前に関東に在住した外国人は、出来る限り早く日本を去るか、安全な地域へ移住させるという政策がとられた。特に、帰国や海外移住が出来なかったロシア人は、日本国内に移住する他なくなった。そのため移住地は、以前から外国人居留地や様々な外国人向けの施設があった神戸を中心とする関西になった¹⁹⁾。その実現のために、日本の港にいたすべての汽船が動員され、(例えば、日本海軍の水雷艇は、横浜・神戸間の運航を毎日2便行った)、

¹⁶⁾ 原文はロシア語で、ラテン語文字で書いた。

¹⁷⁾ 筆者が、上記の *Reports...* で見付けた最後の発行年月日を持つ避難者の確認書は、付属資料3に挙げた。

¹⁸⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 311.

¹⁹⁾ 1923年9月10日付の報告。

総計400人以上を運んだ²⁰⁾。また、外国人が経営する様々な会社、教育機関(例えば、有名なクリスチャンカレッジであるセント・ジョーセフ国際学校)や他の組織が横浜から神戸に移り、以後もしばらくそこに留まった。

神戸では、地震の情報が届いた時、ただちに居留外国人による「神戸外国人援助委員会」(Kobe Foreign Relief Committee)が設立され、そして「亡命ロシア人向け援助小委員会」(Sub-Committee for Relief of Russian Refugees)も出来た。その会長には、現地の英国商社の David H. James が選ばれた²¹⁾。小委員会は、亡命者の受付・臨時宿泊・寄附の集金とその使用などを担当することになり、約400人の受け入れ可能な措置をとった²²⁾。

日本外務省は、最初から出国許可書やその他の必要な書類を提供し始め、ロシア大使館への特別の事情説明書を発行した。その中で、東京・横浜の食糧不足危機や失業、他の諸問題について書いた上で、将来も亡命者の状況が悪化する恐れがあるとし、彼らにとってそれを避けるために最も良い方法は日本を去ることであると記し大使館の協力を求めた²³⁾。

当時、在神戸ロシア領事館には領事等のスタッフがいないかったため、大使館は横浜領事館の書記官ボロフスキー(P. P. Borovskii)と陸軍武官補佐官オシポフ(Ossipov)を派遣し、後に東京へ戻ったオシポフの代りに釜山領事スコロドゥーモフ(V. A. Skorodumov)が来日した²⁴⁾。彼らの主要な任務は、亡命者を出来る限り日本から海外へ送り出すことであった。当局も、大勢の外国人を日本から去らせるといふ狙いがあり、その実現が早ければ早いほど好ましかった。そのために、ロシア大使館および陸軍武官が出した3万円に加えて、「神戸外国人援助委員会」から3万円、日本の慈善組織から2万円、さらに兵庫県知事からも2万円の寄付が集まってきた²⁵⁾。その使用は、ロシア大使館の資金を除いて、上記

²⁰⁾ 1924年1月24日付の報告。Williams, Harold S. *The Kobe Club*. Kobe Club, 1975, p. 37-39.

²¹⁾ アブリコソフは、この David H. James を「Captain James」と呼ぶ(1924年1月24日付の報告)。このジェイムスは、1884年(当時3歳)頃、両親と共に来日したが、日本以外に中国、満州、その他の極東の諸国で活躍した。商社をはじめ、新聞記者・特派員などを勤め、日露戦争にも参加することがあった。1925年頃、神戸居留外国人社会は、関東大震災後のジェイムスの活動・個人貢献等を高評し、彼を「Kobe Regatta & Athletic Club」の総裁として選んだ。

²²⁾ Williams, Harold S. *The First Hundred Years of Kobe Regatta & Athletic Club*. 1970, p. 41-42.

²³⁾ 1923年9月10日付の報告。

²⁴⁾ 1924年1月24日付の報告。

²⁵⁾ 同上。当時1円=0.8米ドル。

の小委員会の監督下にあった²⁶⁾。ところで、亡命者の日本国内の移動は無料になり、政府によって彼らは小額の損害賠償を得るまでになった²⁷⁾。

3. 国外への亡命者の移住

アメリカやフランス、さらに他の西欧諸国への入国査証(ビザ)の規制も一時的に弱まり、日本を去ることを望んでいたロシア人にチャンスが訪れた。例えば、横浜在留の50人のロシア人は、フランスの汽船「アンドレ・レボン」に乗船し、そのままフランスへ行く気であった。しかし、神戸までは無料だが、それから先は有料であるという返事を受けた大使館は、クロデル大使(フランス)に特別の申請書を送り、結局、支払が出来た何人かだけがビザを得た²⁸⁾。さらに、ロシア難民が日本政府から強制的にハルビンか上海へ追放される恐れもあったため、アプリコソフはアメリカ大使館との話し合いを行い、移民割当数等の制限に関する特別優先権を求めた。亡命者の大部分はアメリカへの移民を希望したが、当時のロシア国籍(在日ロシア人ばかりでなく)外国人に対する移民割当数は月に約185人であった。一方、アプリコソフが望んだのは、約200人を無料でアメリカへ送ることであった。アメリカ政府に圧力をかけるため、日本外務省の知人にも協力を求めた²⁹⁾。

4. 「第一波」の亡命ロシア人

1917年の2月革命と同年の10月革命後に来日したロシア人の大多数は、いわゆる「偶発的に来日した人々」であった。日本に定住することを考えず、異文化・異郷における生活や仕事の経験も持っていなかった彼らは、革命の脅威を感じながらも「遠い将来」の計画を立てることができなかった。大混乱に陥って、住み慣れた場所を立ち去らざるを得なかった彼らは、異郷において途方に暮れた。その人々の中には、帝政ロシアの地方官僚や、小役人、退役将校、貴族³⁰⁾、さら

²⁶⁾ 1924年1月24日付の報告。

²⁷⁾ 1923年9月10日付の報告。

²⁸⁾ 同上。

²⁹⁾ 1923年9月10日付の報告；1923年8月31日及び1924年7月25日付の報告。

³⁰⁾ 例えば、臨時政府の最初の首相、リヴォフ公爵(G. N. Lvov)が1918年来日し、その他の帝政ロシアのエリートの代表者もしばらく滞在していた。

にシベリア各地域の政府の大臣や官吏、それに一般市民などがいた。財産の全部を捨てたの上、祖国から命からがら逃げた彼らは、やっと日本にたどりついたが、金銭的な問題をはじめ、他国への入国ビザ等の問題により日本にしばらく残らざるをえなかった。皆が「古き良き過去」の夢にあふれてそのまま住み続けながら、将来についての最低限の希望はアメリカかヨーロッパへ行くことだった。そのため日本に根を下ろすことができず、日本社会に受容されることもなかった³¹⁾。しかし、地震復興のための国際的援助によって、彼らにチャンスが再び現れた。地震は、無事に生き残った亡命者の大部分には、自分の「脱走」を続けるための動因となった、といっても過言ではなからう。

特に、亡命生活に伴う困苦で疲れ果てた彼らには、道德の低下がしばしば見られた。例えば、パニックが少し落ちついた時に、町にいたところにシャベルを持つロシア人の姿が見えたという。あるロシア人(とりわけ、一時的に長崎に住んでいた有名なコサック中将グリゴリー・セミョーノフの一味)が、金銭や高価な所持品をたくさん持っていたが、日本の銀行に対する信用不信のため、そのすべてを自宅で保管したと言うような噂もあった。また、略奪に似た「金鉱探し」が横行し、しかも彼らが毎晩大使館へ宿泊のために帰ったため、外交官と他の難民に非常に迷惑をかけていた³²⁾。

亡命者社会によくみられるような不穏な雰囲気が当時の在日ロシア人の間にもみなぎっていた。たとえば、日本発の汽船の切符を無料で取得したにもかかわらず、それを勝手に高く売ったり、座席や部屋のクラスに関する自分の不満やわがままを外国人委員会の代表者につけたり、わがままな意見を出す人も少なくなかった³³⁾。ある女性が切符を売って化粧品を買ったが、再び新しい切符を求めて断られた場合に、相手に「紳士らしくない」というような文句を言った。別の人はメキシコへの途中に、ハルビンにも寄りたくなり、そしてハルビンまでも無料で行きたがった。神戸の小委員会のジェームス会長が、後に大使館へその全てについて報告した³⁴⁾。

結局、神戸の小委員会とロシア大使館の努力によって、新定住地を求めた約300人の亡命者のうち250人以上を日本から送り出せることになった。その大多数

³¹⁾ Abrikossow, Part 2, p. 72.

³²⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 310–3111.

³³⁾ Abrikossow, Part 2, p. 71–72.

³⁴⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 311–312.

はアメリカへ行き、アメリカ入国許可を受けなかった人は隣のメキシコやカナダへ向かい、さらに約30人がヨーロッパへ向かった³⁵⁾。その当時は、ソビエト政府のプロパガンダに対する戦いも続いていた。例えば、地震直前にROSTA³⁶⁾の代表者として来日したヴォズネSENSキー(Voznesenskii、元帝国外務省職員)は、神戸外国人援助委員会のメンバーとなり、その場で亡命者にロシアへ帰るように積極的に勧めていた。しかし、彼の活動は他の会員からの支持を受けられず、委員会の最終報告によると、ウラジオストクへ帰る希望を表明したものは1人だけであった³⁷⁾。

ロシア大使館の記録によると、関東大震災を体験したロシア人は、なるべく日本を去ろうと試みた³⁸⁾。彼らを来日した亡命ロシア人の「第一波」とすれば、関東大震災は、旧帝政ロシアから日本へ向かう「亡命」という現象の境界となったと言っても良いだろう。

5. 「第二波」の亡命ロシア人

1923年以降もロシア人は日本に住んでいた。しかし、その後日本を定住地として選んだ亡命者は、ほとんど震災後に来た者ばかりで、彼らの階層構成もまた変化した。その中の大部分は、「第一波」と異なり、庶民階級出身者が多く、その一部はシベリアに住んでいた農民、小売店主や行商人、更にコルチャック提督のもとで白軍で兵役を勤めた兵隊やコサック等、つまり物事を現実的に考えた人々であった³⁹⁾。彼らは、「第一波」の亡命者と違って、ロシアから直接日本に来るのではなく、「第三国経由」という方法を選び、来日前に既に中国やアメリカなどの他国で亡命生活を経験していた。ゆえに、この「第二波」の亡命者は、異郷への順応やそれに伴う諸問題についてもある程度準備を済ませていた。その結果、普通ある「新入りのよそ者」と「この土地」の人間の間にある壁があまり感じなかった。ちなみに、日本在住中にもっとも成功をおさめ、日本人にも認められた洋菓子メーカーのモロゾフ、ゴンチャロフ、野球選手のスタルヒンの家族、さら

³⁵⁾ 1924年1月12日付の報告。大使館が提供した資金のほとんど全部は、ヨーロッパへ向かった亡命者の交通費のために尽きた。

³⁶⁾ ロシア通信社(1918-1935)の略称。

³⁷⁾ 1923年11月9日付及び1924年1月12日付の報告。

³⁸⁾ 1924年1月12日付の報告。

³⁹⁾ Abrikossov, Part 2, p. 72.

に芸術家のレオ・シロタなどが、この「第二波」の亡命ロシア人である。また、彼らの大部分は、「第一波」の難民と違って、来日する目的は、革命の恐怖から「命を守る」ことではなく、「商売」（ビジネス）を狙うことであった。この中国から来たロシア人は、西欧化への道に立ったばかりの当時の日本社会の需要を理解し、先ず布地・洋服などの行商者として活躍し、更にロシア料理店などにも成功した⁴⁰⁾。大正・昭和前期の日本は、まだ伝統に厳しい国であり、職業・専門のすべては普通息子が父親を相続した。人々の生活はほとんどすべてあらかじめ決まったパターンにしがっていた。西欧化の波が全く届かない地域がまだたくさんあり、そこに暮らす人々は何百年前と同じように現地にある店しか知らず、そこにある物ばかり買って満足するという状態であった。ところが、「外国人商人」に出会うようになった彼らは、「外国製品」といわれればどんなにつまらない物であっても買うようなものまでできた。例えば、銅製の時計を「金製」であるとして売ったり、詐欺を行ったりする行商者の数も増えてきた。正直をモットーにする行商者であっても、商売の利益は驚くほど大きかったので、そのうち何人もがすみやかに大きな富を築いた⁴¹⁾。

若いロシア人たちは、日本の会社または既に日本に根を下ろした亡命者たち（第一波の一部）に呼ばれて、ハルビンや上海から特別な商売をするために日本に来る場合があった。彼らにとって、このような行商で生計を立てることは、全く珍しいものではなかった。なぜならば、1920年代前半、上海をはじめ、中国の各地域に住んでいた白系ロシア人のうちでは、「羅紗売り」や「行商小売り」が最も人気の高い職業であったからである⁴²⁾。特に、日本では、中国国内の状況と比較すれば、「紅鬚子」（強盗団）による盗難や身代金目当ての人の略奪等が全くなく、その他の危険もほとんどなかった。当時、日本の警察や現地の行政機関は外国人に好意的態度をとっていたという⁴³⁾。地震後の日本は、様々な分野で「復興」または「近代化」を求めて、国内市場に貢献する見込みのあった外国人を、入国手続きの面でもその他の面でも好遇した。たとえば、以前には厳しい「現金提示制度」（1920年2月17日以降、国籍を問わず来日する外国人は入国時に1人当たり1500円持っていなければならないという法規が実施されていた）があ

⁴⁰⁾ Abrikossow, Part 2, p. 93-94.

⁴¹⁾ 同上；1924年1月12日付の報告。

⁴²⁾ Балакшин П.П. *Финал в Китае*. Т.1-2, Сан-Франциско, 1958-59 гг. Т. I, с. 330.

⁴³⁾ Abrikossow, Part 2, p. 94-95.

った。しかし、この「日本出稼ぎ」のロシア人の場合には、日本に住んでいる身元保証人さえいれば、お金が足りなくても普通入国できたという⁴⁴⁾。ところが、ロシア大使館は最初から彼らの事件に巻き込まれないような対策をとった。自分の意志で来日した彼らは、外交官の目からは「真の難民」ではなかったからである⁴⁵⁾。

6. 関東大震災後のロシア正教社会

地震は、東京・横浜における正教社会にも大きな損害を与えた。明治時代から東京の名所の一つであった有名な「ニコライ堂」等の建物がほとんど崩れ、日本人の信徒達がセルギー大主教らの面倒をみることになった。ほぼ同時にニコライ堂の再建のための寄付集めがなされ、亡命者だけの力が足りないので、セルギーがハルビンなどへも通った⁴⁶⁾。1927年末までに約10万円を集めた。そして、1929年11月に、新教会の献堂式が行われ、当時の在日白系ロシア人がほとんど全員が出席し、ハルビンのネストル大主教やユヴェナーリーまでも賓客が多かった⁴⁷⁾。ニコライ堂の迅速な復興は亡命者の精神的なささえとしての意味が大きかった。多くのロシア人が教会の合唱団に無料で活躍し、「教会献金」や「学校献金」を行い、さらに慈善コンサートを行うまでにもなった。彼らは、復興が始まったばかりの横浜でも色々な催しを行った。それはたいてい、大講堂をもった横浜グランドホテルの舞台で行われた。特に、横浜には諸外国からの外交団も存在し、そのメンバーにより、たいてい満席になった⁴⁸⁾。難民の精神状態を落ち着かせるために、1924年からハルビンや上海からのロシア人歌手・芸人が来日公演を行った。

⁴⁴⁾ Наумов В.М. Мои воспоминания. Сан-Франциско, 1975. 以下に、Мои воспоминания に略称する。

⁴⁵⁾ 1924年1月12日付のギルス宛ての大使館の報告。

また、Подалько П.Э. 著 Предпринимательская деятельность русских эмигрантов в Японии в 1920-30-х гг. — 『スラヴィーナ』13号 (1998年刊) も参考になる。

⁴⁶⁾ Мои воспоминания, с. 50.; Abrikossow, Part 2, p. 93–94.

⁴⁷⁾ Мои воспоминания, с. 50.

⁴⁸⁾ 当時、横浜の外交団のうち、多数の外交官はロシア人の妻を持ち、それもある程度ロシア人社会に良い効果を表した。— Мои воспоминания, с. 52–53.

7. 関東大震災による日ソ国交樹立の延期

関東大震災がもたらしたもう一つの思いがけない政治的な影響は、日ソ国交樹立の延期である。北京で行われた非公式の日ソ交渉では、その事前準備や必要な条件の、ほとんどすべてが1923年夏末までに整い⁴⁹⁾、公式の手続きが残っているにすぎなかったが、日本政府は大規模な災害とそれに続いた復興のため、大連と長春、両会議で達した中間結果をさらに発展させる気を失くし、日ソ国交樹立の実現が一時的にその重要性を失った。それどころか、日本政府は、ソ連側が提案した援助も、イデオロギー色が強かったため、拒否した⁵⁰⁾。そのために、旧帝政ロシア大使館は約18ヶ月延命することとなった。

1924年末、日本全権駐北京大使芳沢謙吉は、ソヴィエト全権公使レフ・カラハン(Karakhan)と会見し、二国間交渉を再開し、1925年1月20日に日ソ国交樹立条約を結ぶことになった。その直後、1925年2月15日にアプリコソフは旧大使館を閉館した⁵¹⁾。彼は、帝政ロシア最後の公式代表者として白系亡命者に対する面倒をみた上で、1924年末以降、亡命ロシア人の地位や日本政府の彼らに対する態度・対策などについての話し合いを行った。とりわけ、地震による旧大使館の延命は、その話し合いのために「時間稼ぎ」になり、決定的なことになったとも言えるだろう。

その結果、幣原外務大臣との最後の会見で、アプリコソフは、「無国籍」身分になった亡命者が、政治的活動を避ける限り日本当局により守られることになるという約束をえた。これ以降、日本におけるロシア人は、今度来る「ソビエト人」と「無国籍亡命ロシア人」(白系ロシア人)の二つのグループに分けられるようになった。

8. おわりに

関東大震災までに来日したロシア人は、亡命生活の経験をもっていなかった。彼らは、日本に定住することも考えず、アメリカやヨーロッパへ行くことだけを願ったが、金銭的困難等の問題によって、日本にしばらく残らざるをえなかった。

⁴⁹⁾ 1923年7月20日付の密電；1923年11月3日付の報告など。

⁵⁰⁾ 1923年9月28日付の報告。

⁵¹⁾ *Revelations of a Russian Diplomat*, p. 320.

しかし、震災後の日本政府の政策や国際的援助によって、彼らはまず、関東地域から安全な神戸へ移住させられたが、最終的には、神戸の外国人援助委員会と旧ロシア大使館の共同努力によって、何百人かを日本から送り出すことができた。

その後日本を定住地として選んだ亡命者は、殆ど震災後に来た者ばかりで、この「第二波」のロシア人は、社会的・精神的に「第一波」と異なる人たちであった。また、彼らの半分以上は、来日前に既に他国で亡命生活を経験していた。

つまり、関東大震災は、数年間にわたって日本に居留する外国人の分布図を変えたとともに、来日ロシア人社会の「イメージ」をはじめ、その社会階層や職業分野にも影響を与えたのである。

付属資料

以下の1-3の資料は、筆者が1999年度のアメリカのスタンフォード大学付属フーバー文書館で取材を行った時に発見した関東大震災と亡命ロシア人に関する資料の一部である。文章のスタイル・名前の書き方等は、原文のままである。

1. 関東大震災のときに死亡したまたは行方不明となったロシア人の名簿：

1. Абрахманова Биби Хавер Абрафмар-Нова, Биб-и-Хауел
 2. Абрахманова Рамзея 1-летн. Абрафмар-Нова, Рамзея 1歳
 3. Агафуров Нареддин Зареддинович
アガフーロフ、ナレジン・ザレヂノヴィチ
 4. Агафурова Софья Исламова Агафур-Нова, Софья-Ислам-Нова
 5. Аитов Шаукат 1-летн. Аитов, Шаукат, 1歳
 6. Афанасьева Лариса Гавриловна
アフナーセフ、ラリサ・ガブリロヴナ
 7. Афанасьева Наталия 10-летн. Афана-Нова, Наталия, 10歳
 8. Бергман, дети — Антонина Бергман家、子供：—アントニーナ
 9. — Вера —ヴェーラ
 10. — Раиса —ライサ
 11. — Леонид —レオニード
- (ベルグマン家の墓は、神戸の外国人墓地にある — 筆者注)

12. Блонский Иван Яковлевич Др. ブロンスキー、イワン・ヤコヴレヴィチ
13. Блонская Татьяна внучка Гурко Осмольяненко
ブロンスカヤ、タチアナ (グルコ・オスモリャネンコの子孫)
14. Боксер Рахиль Ильинична ボクセル、ラヒル・イリニチナ
15. Боксер Матвей 11 мес. ボクセル、マトヴェイ 11ヶ月
16. Бусыгин Михаил Михайлович
ブスイーギン、ミハイル・ミハイロヴィチ
17. Бусыгина Варвара Александровна
ブスイーギナ、ワルワラ・アレクサンドロブナ
18. Ваганова Биби Хадига ワガノワ、ビビ・ハジガ
19. Ваганова Хаузия Хиалитдиновна ワガノワ、ハウジヤ・ヒアリヂノヴナ
20. Ваганов Ахмет Ясовей ワガノフ、アフメト・ヤソヴェイ
21. Ванштейн Александр Иосифович
ワンステイン、アレクサンドル・イオシフォヴィチ
22. Ванштейн Софья Петровна ワンステイン、ソフィヤ・ペトロブナ
23. Веницкий Владимир Ефимович
ビニツキー、ウラジミル・エフィモヴィチ
24. Власьевская Валентина Александровна
ヴラーセフスカヤ、ワレンチーナ・アレクサンドロブナ
25. Власьевская Зоя 11- летн. ヴラーセフスカヤ、ゾヤ 11歳
26. Гафарова Мариам 1 год ガファロワ、マリyam 1歳
27. Гордон Клара Борисовна ゴルドン、クララ・ボリスブナ
28. Густарина Марья Дмитриевна グスターリナ、マリヤ・ドミトリエブナ
29. Довголевич Марья Васильевна
ドブゴエーヴィチ、マリヤ・ワシリエブナ
30. Земляков Владимир Иванович — умер и похоронен в Кобе
ゼムリャコフ、ウラジミル (神戸に死亡、埋葬した)。
31. Кациенко Маргарита 13 лет カツイエンコ、マルガリタ 13歳
32. Криводушева — повидимому, приезжая. Жила в Наттори отель.
クリヴォゾーセフ、
—恐らく、新入り(外来者)で、ナトリ・ホテルで宿泊した
33. Криводушева — маленькая девочка Криヴォゾ́еф、幼い娘

34. Курляндская Фрида クルリャンドスカヤ、フリーダ
35. Ледер Нина Ивановна レーデル、ニナ・イワノブナ
36. Лысова Мария ルイーソワ、マリナ
37. Обедин Алексей Никифорович
オベージン、アレクセイ・ニキフォロヴィチ
38. Орделли артист ОлрДерри 俳優
39. Павленко Иван Николаевич – артист
パヴレンコ、イワン・ニコラエヴィチ 俳優
40. Парре Лев Александрович– финляндский гражданин
パッレ、レフ・アレクサンドロヴィチ：フィンランド国籍
41. Пивоваров Андрей ПивоВарёров、アンドレイ
42. Попировник Иван Иванович 12 лет
ポピロブニク、イワン・イワノヴィチ 12歳
43. Прозоровская Сусанна Федоровна
プロゾロフスカヤ、ササンナ・フォドロブナ
44. Птицына Вера Филипповна プチーツイナ、ヴェラ・フィリッポブナ
45. Русин ルーシン
46. Русина ルーシナ
47. Рыдник Софья Семеновна ルイードニク、ソフィヤ・セミョノブナ
48. Свидерский Аввакум Аввакумович
スヴィデルスキー、アッヴァクム・アッヴァクモヴィチ
49. Сергеева Елена Федоровна СерГеев、エリナ・フォドロブナ
50. Сергеева Елена Николаевна СерГеев、エレナ・ニコラエブナ
51. Серебренникова СеРебренНикова
52. Ребенок 子供
53. ребенок 子供
54. Сокольников Николай Павлович
ソコリニコフ、ニコライ・パヴロヴィチ
55. Стучинский СтОучинСкий
56. Сурачев СлА-Чев
57. Сурачева СлА-Чев
58. Толстая-Милославская Татьяна Михайловна

トルスタヤ・ミロスラフスカヤ、タチアナ・ミハイロブナ

59. Урванцев Федот Степанович

ウルワンツェフ、フェドト・ステパノヴィチ

60. Хрещатицкий Алексей 13 лет Фреша Чутский、アレクセイ、13歳

61. Червянская Евгения Иосифовна

チェルヴリャンスカヤ、エヴゲニヤ・イオシフォブナ

62. Шитикова Тамара Александровна

シチコワ、タマラ・アレクサンドロブナ

総数 62人(その内：男性 — 18人、女性 — 28人、子供 — 16人)

この名簿では、タタール人をはじめ「回教」の名前を持つ者9名 (№№ 1-5, 18-20, 26)、次にユダヤ系およびドイツ系の名前を持つ者約15名 (№№ 8-11, 14-15, 21-23, 27, 29, 34-35, 47, 61)、フィンランド人の1名 (№ 45)、その他に「ロシア人」(正教または他のキリスト派)らしい名前を持つ者約35名が入っている。また、№№ 52-53 の名前は不明である。

2. 1923年9月1日の地震の時に身体傷害者になったロシア人の名簿：

1. Ваганова Фатима — ранена в голову ワガノワ、ファチマ —頭の傷
2. Вильм Артур Карлович — повреждена правая рука
ヴィルム、アルトル・カッロヴィチ —右手の傷
3. Власьевский Лев Филиппьевич — ранена нога
ヴラセフスキー、レフ・フィリッポヴィチ —足傷
4. Шер Лидия Борисовна — сломана нога セル、リヂヤ・ボリスブナ
—足骨折
5. Шистовская — сломана нога. シストフスカヤ —足骨折

総数 5人 (その内：男性 — 2人、女性 — 3人；回教の名前を持つ者1名 (№ 1)、ドイツ系の名前を持つ者2名 (№№ 2, 4)、ロシア人らしい名前を持つ者2名 (№№ 3, 5)が入る)

(1)と(2)の名簿はどちらも、駐日ロシア大使館の作成(1923年10月23日付)。民族の区別は、筆者の推測によるものである。

3. Справка

Российское посольство в Токио

20 декабря 1923 г.

№ 329.

В Канцелярию Старшего Дипломатического
Представителя в Париже.

Ссылаясь на отношение от 3 ноября с.г. за № 953 Посольство имеет честь уведомить, что генерал Данилов во время землетрясения проживал не в Иокогаме, а в окрестностях Токио и остался жив, но спустя два месяца после землетрясения, а именно 30 минувшего Ноября скончался от разрыва сердца.

Приложенное к отношению письмо было передано вдове покойного.

Управляющий посольством: Д.И.Абрикосов.

確認書(翻訳)

在パリ主任外交官事務所御中

在東京露西亜大使館

1923年12月20日

№329

本年11月3日付 №953 の御依頼書に関して、ダニーロフ将軍が地震の時に横浜ではなく、東京の近郊に住んでおり、本人は無事に生き残ったが、2ヶ月後の11月30日に心臓破裂で死亡したことを通知致します。追加の手紙が将軍の未亡人に渡されました。

大使館の管理人 D.I. アプリコソフ(サイン)